

【教學實踐與研究專題】日文系堀越和男 用影像說故事培養學生多元能力

趨勢巨流河

(文字／吳婕凌，圖／堀越和男提供，責任編輯／郭萱之)

教學現場

日文系副教授堀越和男為了提升學生的日語能力，以日文為工具，用影像記錄生活中的故事，他把這樣創新的想法帶入教學，指導學生以日語來進行紀錄片影像製作，讓學生因為做喜歡做的事而樂於主動學習。在大四「日語會話（四）」的課程中實行，得到教育部教學實踐研究計畫補助。受訪時他強調：「並非只以提升日語能力或學習技能作為學習目標，而是以一個出社會前的準備教育，將基礎性、通用能力作為日語教育學習目的的新嘗試，結合影像製作出畢業專題，來進行日語會話課程的實踐研究。」

計畫動機

堀越和男指出「未來社會所需要的人才不僅只是具備外語能力，而且另外具備創造力、良好的人際關係以及懂得隨機應變。」他認為大學應該在這些能力的培育上多下功夫，若大學裡的養成課程無法做到，將面臨被取代的命運。但就現狀來看，現在一般日文系的課程仍以日語的知識與能力的提升為焦點，促使他想要在教學中做革新。在課程中讓學生製作紀錄片從民國93學年開始實行，學生在課程中學習專業理論後，實際應用於製作紀錄片，希望過程中的演練，除了學習日語外也培養出協調性、創造力、團隊合作、媒體應用和編輯技術等能力。

計畫主題

堀越和男做出了日語教育中的新嘗試，希望學生們透過製作影片，不僅只是日語能力的學習應用，並包括影像拍攝、編輯等技能。透過採訪、接觸各樣的人事物，再消化後用團隊的角度來加深故事，最終變成一部部有意義的、帶著力量的成品製作為畢業專題，以紀錄片的形式做為學習成果發表。

研究目的

希望能突破傳統日語課程的教學方式，讓學習者實踐在學習中行動，並驗證教學效果，且進行有效的因素分析，最後確立此教學方法論的可行性。研究成果則透過「語言」這項工具，經由採訪、聽故事和語言轉譯後說故事，打動文化背景不同者的心，和

他人產生共鳴；也盼能提供其他教師規劃課程時參考。

研究方法

堀越和男是以「PBL問題導向學習法」為基礎，透過問題或情境誘發學生思考，在過程中設定進度；運用協同教學，進而完成研究。整個研究過程包含了拍攝前準備、教導影像作品製作理論、執行拍攝、成果發表、反思回饋、問卷調查。

在大四會話課結合紀錄片製作，融合會話課程所教授的日語能力及生涯教育理念，應用在畢業專題製作上。除了專題應有的影像作品製作理論，搭配「讀書會」讓學生有開會討論的切磋空間，體會團隊精神、分工合作的重要。在展出成品後，製作團隊要寫一篇心得感想，內容包含作品的製作過程與團隊對拍攝主題的想法，並做問卷調查；以質化和量化的研究成果傳承給學弟妹。

教學成果

在10多年前的創新想法，卻遭部分同學質疑，讓堀越和男十分挫折。但隨著教學翻轉的潮流，如今日文系提供多樣化的課程，讓學生自行選擇畢業專題呈現方式，除了紀錄片外，還有雜誌編輯、語言話劇、翻譯等等，藉以確立學生初始便有基本的動機和興趣。

實施至今，過程中他不斷修正，團隊合作免不了成員間的衝突，他採取事前「打預防針」的方式，降低溝通不良；若無法避免，作為輔導者的他直接和學生一對一排解問題，針對每個人不同的個性和能力特質給予建議。

即使有挫折，學生的成果和回饋就是支持他持續的動力，藉由拍攝影片這個媒介去學日文，跳出學習框架，邁入社會多元接觸，直接獲得情感反饋，這些都是學生需要去學習的。有個學生在發表榮民之家的作品時，哭得不能自己，原先大家不了解為何會有這樣的情緒反應，待紀錄片播放完畢，所有同學不需透過言語也能了解箇中原由。製作和觀賞影片成為當今趨勢，每個人都可以是創作者和閱聽人，堀越和男鼓勵學生自願去做自己關心的主題，並以日語口白、中文字幕的方式呈現，讓兩方語言如河水般自在流動；在製作過程中，學生能看見自己心智的成長、能力的進步，並了解到團隊的力量，這樣的成就感帶動學習動機，更是他至今不變的初衷。這些年裡他看到：學生在團隊中盡力做好自己的角色、遇事努力去協調溝通、最終創造出感動人心的作品，整個過程，都是培養進入職場後所需具備的能力，而透過這種方式去學習語言更不容易遺忘。堀越和男盼望學生擁有積極力面對人生的課題；用溝通力去協調；協助他人加強貢獻度；凝聚向心力並增溫同儕情感；懷著感謝的心，因為所有人共同努力才造就今天的自己。

持續精進

堀越和男希望看到學生的潛力發揮到極大值，也認為需要跟著時代的腳步，用新的教學方式去帶領學生、因材施教，計畫的發想也是為了學生需要更多元、多面向的學習，創新求變；他勾勒這樣的大學教育，方能讓他們具備面對未來職場所需的各種能力，不忘探索生命的意義。

107學年度畢業生分享

張雅筑回想畢製的過程：「最困難的地方是決定主題，從發想到實際拍出來的成品不一樣，最初是想拍手遊相關議題，但後來在呈現上出現難題，經過討論，組長提出說故事的方式。我們的難題還有選角、拍攝時間的配合等；拍攝持續了一週的時間，後製的問題也要克服，像是字幕翻譯修改了非常多次；影片剪輯和配音也蠻複雜，靠著大家分工合作順利完成，看到影片放映出來的瞬間真的很感動，覺得一切都值得了！」

黃彰櫻則分享「因為對攝影的憧憬以及想學習影片剪輯，因此選擇了堀越老師指導的畢業專題。這門課不輕鬆，拍片耗時是最大挑戰，為了提高效率，我們盡力做好時間管理和分工，過程中曾發生劇本寫好，卻在開拍前被採訪對象拒絕，只好全部重來的悲慘事件。大家一起討論、解決問題。我非常喜歡這堂課，因為老師在開始拍攝前，讓我們了解各種拍攝剪輯手法，以及運用該手法後的效果呈現。因此我們可以根據想要表達的內容選擇攝影和剪輯的方式。很感謝老師每個禮拜都會檢查各組進度，讓我們一點一滴去累積拍攝、剪輯、翻譯和錄音等元素以完成作品。其中翻譯部分是我認為最辛苦的，因為本組作品是同屆裡旁白最多的，還包含專有名詞，我們千辛萬苦才完成了翻譯部分。在過程中我曾因與組員的溝通不良而導致不愉快，經由老師提點，意識到大家都是求好心切，對作品抱持著熱情才會導致摩擦，反而體認到團隊中溝通的重要性。」

profiles

外國語文學院日本語文學系

堀越和男副教授

大正大學文學研究博士

107學年通過教育部教學實踐研究計畫名稱：日文系大四會話課程中學習製作紀錄片

經歷：

東京國際大學付屬日本語學校兼任日本語教師

日本交流協會高雄事務所文化室《日本語普及專門家》

日本交流協會台北事務所文化室《日本語教育專門家》

淡江大學日本語文學系助理教授

淡江大學日本語文學系副教授

教學實踐研究計畫期末成果報告
日文系大四會話課程中學習製作紀錄

計畫主持人：堀越和男 副教授
任職機構：淡江大學 日本語文學系



<p>計画要旨</p> <p>本授業は、ドキュメンタリー制作を取り入れた4年生の会話授業をPBLに基づき設計し、日本語能力と様々なスキルを習得できるようにしている。そして、それを卒業制作と連携させるながら、社会へ出る前の準備教育として基礎的・応用的能力の修得を目的とした一つの日本語教育の実践として行い、本研究ではその実施と結果について報告する。</p> <p>キーワード：クリエイティブラーニング ・PBL・映像作品制作・構成主義・協働学習</p>	<p>「日語会話(四)」の概要</p> <p>1. 授業の目的(左記既述) 2. 本授業の概要 ①実践機関と履修者：淡江大学日本語学科 4年生20名 ②実践期間：107学年度1学期 ③授業の方法 映像作品制作では、映像制作の理論を学び、それを実践していくといった方法で授業が行われるが、それが本課程の中心となる。 ④解説担当者は指定されたテキストの内容を読み理解して、それを自分なりの表現でPPTにまとめ、20分～30分で日本語で解説する。 ⑤担当者は解説が終わると、日本語で内容に関する質疑応答を行う。 ⑥その後、学習内容に関する小テストを行い、採点した後、登壇返却する。</p>	<p>2. 二学期勉強会 2回目の練習作品の制作により動画編集能力を高め、先輩が作った作品を分析、評論し、知識を深める。</p> <p>調査の概要</p> <p>①調査対象：本科目履修者20名 ②調査方法：質問紙調査(35項目からなるリッカート形式の5件法のアンケート) ③調査日：2019年5月中旬</p> <p>考察</p> <p>1. 学生らが得たこと・学んだこと ◆チームワークの重要性を学んだ ◆ソフト(WordやPPT、映像編集等)の使い方が上手になった ◆日本語のプレゼンテーション能力が高まった ◆人間関係の築き方について勉強になった 2. 学習に効果的な授業を行うには ◆授業での映像理論の学習を有意義なものにする ◆授業で学んだ映像制作の理論を勉強会の実践に結び付ける ◆クラスの雰囲気营造良好に促す ◆発表する学生だけでなく、聴く学生もしっかりとした準備を行わせる ◆学生自身日本語を試そうと意識して授業の準備させる ◆教師は適切で有益なアドバイスやサポートをする ◆学生たちが互いに協力的で友好的な感情を持つようにする ◆学生たちに自らの世界観の広がりを感じさせる 3. 教師の役割 本授業での教師は、教授者、ファシリテーターとしての役割はもちろん、日本語のチェックと映像制作のアドバイザーとしての役割も求められる。</p> <p>教学成果(107卒業制作)</p> <p>「時間を取戻すお医者さん」 「ルネサンス 一思、追う、叶う」 「顔を上げて歩こう」 「あなたはあなたであればいい！」</p>
<p>研究動機と目的</p> <p>民国93年度から映像作品制作を通して日本語を学ぶといった授業を始めた。これは作る作業の中で学びを深めるといったクリエイティブラーニングの理念に基づいている。映像作品制作では日本語はもちろん、論理的思考力、撮影技術や映像編集能力、創造力、問題解決能力、交渉力、チームワーク等も必要となる。本研究では、学生がこの授業で何を学んだと感じているのか、また活動の中で効果的に学習を進めるにはどうすればいいのにかについて明らかにする。そして、授業の目的、彼らの目標を達成させるために教師は何をすべきか、その役割についても考察する。</p>	 <p>図1 映像作品の検証と討論</p> <p>学習形態</p> <p>本授業では構成主義の理念の下、二人或いは三人で一つのチームを組み協働学習により活動を行った。各チームのメンバーは互いに尊重し協力し合いながら、作品を完成させるまでの過程において様々な課題を主体的に達成させていく中で学ぶ。</p>	<p>卒業制作</p> <p>淡江大学日本語学科は、4年生のカリキュラムに「卒業制作及び指導」があるが、これは論文・レポート・翻訳・映像作品制作・ディベート・演劇・旅行ガイド実習・雑誌編集、日本語制作の中から一つを選び、指導教授の下でそれを1年間で完成させるというものである。</p>
<p>シラバスデザイン</p> <p>本研究では、PBLの六つのフェーズ(準備・導入・実行・発表・省察・評価)に従い、授業設計を行った。</p>	<p>映像作品勉強会の実施</p> <p>1. 一学期勉強会 講義とそれに基づく演習、そして卒業制作制作の三つの学習内容で構成されている。最初にNHKの番組の某作品を題材にその原作と映像との関係を分析する。演習では、10分程度の1回目の練習作品を作る。</p>	<p>考察</p> <p>1. 学生らが得たこと・学んだこと ◆チームワークの重要性を学んだ ◆ソフト(WordやPPT、映像編集等)の使い方が上手になった ◆日本語のプレゼンテーション能力が高まった ◆人間関係の築き方について勉強になった 2. 学習に効果的な授業を行うには ◆授業での映像理論の学習を有意義なものにする ◆授業で学んだ映像制作の理論を勉強会の実践に結び付ける ◆クラスの雰囲気营造良好に促す ◆発表する学生だけでなく、聴く学生もしっかりとした準備を行わせる ◆学生自身日本語を試そうと意識して授業の準備させる ◆教師は適切で有益なアドバイスやサポートをする ◆学生たちが互いに協力的で友好的な感情を持つようにする ◆学生たちに自らの世界観の広がりを感じさせる 3. 教師の役割 本授業での教師は、教授者、ファシリテーターとしての役割はもちろん、日本語のチェックと映像制作のアドバイザーとしての役割も求められる。</p>

聯絡方式： 堀越和男 副教授
淡江大学日本語文學系
Email: 122496@mail.tku.edu.tw

計畫成果資源： 参考：107学年度卒業制作
「時間を取戻すお医者さん」
「ルネサンス」
「顔を上げて歩こう」
「あなたはあなたであればいい！」




學生畢業製作
成果之一

<https://bit.ly/33EugVT>



淡江時報社